とある戦国漂流

ヨッシー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある戦国漂流

【Nコード】

N2119Y

【作者名】

ヨッシー

【あらすじ】

ある日、上条は神奈川県にある新築の実家にいる両親に呼び出された。そこにタイミングよく学園都市第3位超能力者のこと御坂美琴が帰郷が重なる。二人はとある部屋で封印されていた巻物と刀を見つけて封印を解かしてしまった。その時、先祖の霊を覚め2人を戦国時代に飛ばしてしまう・・・だが、飛ばされた戦国時代の名高い武将たちはほとんどが女性だった・・・

始まりの家系図（前書き）

こんにちは！ヨッシーです！

最近、読んでいる小説で『織田信奈の野望』を読んでおりまして、禁書目録と合わせることで出来るのでは・・・と思います、気まぐれで書いてみました！

初めは恋姫でもいいな〜〜と思いましたが、本郷がフラグを立ててしまい、上条さんの一級フラグ建築ができないと思い・・・時を戦国した女だらけの時代にしてみました！！

原作主人公の相良良晴も登場、二人の国取り・・・いや、^{フラゲ}旗取り合戦がここに始まります！

さて、上条当麻は戦国の世を駆け抜けることができるのか！！

では本編どうぞ！

始まりの家系図

始まりの家系図

とある住宅街

刀夜「お〜〜！当麻！帰ってきたか！！」

詩菜「あらあら、当麻さん、お帰りなさい」

当麻「あ……た……ただいま」

とある日……上条当麻は両親にいきなり呼び出され、学園都市から神奈川県にある実家に帰ってきた。当麻本人はあのインデックスの事件により記憶が消されてしまい、ふるさとという気持ちが今少し湧いてこないでいた……

刀夜「ん？当麻どうした？なんだか他人の家に来たような顔して？」

当麻「あ……！悪い、父さん……学園都市にずっと暮らしていたからなんだか感覚がおかしくなってる」

詩菜「あらあら〜でもそうね。お家が新しくなったんだから仕方ないわね」

当麻「あははは・・・たしかにそうだね。母さん」

夏休みのエンゼルフォールの事件で新しく作った家は吹き飛んだが・・・最近になり再建が終了し両親はここで暮らし始めているのだ。

当麻「ところで父さん、母さん。こんなときになんで俺を呼んだんです？新しい家の紹介のためかい？」

刀夜「まあ、そんなところだ。久しぶりに親子水入らずの時間を過ごしたいからな！いいだろ。当麻？」

当麻「あ・・・ああ（やべ～～～俺、記憶ないことバレちまいそうだ）」

刀夜「よし、話は家の中でじっくり話そう！・・・お！」

当麻「どうした・・・ん？・・・うっ！？」

詩菜「あら？」

早速、新宅に入ろうとした上条ファミリーの目線の先には・・・！！

美鈴「どうよ。美琴ちゃん！久しぶりに帰ってきた実家の感想は！」

美琴「な・・・なにそんなにハイテンションなの？」

美鈴「ふふん～～それはね～～・・・あ！お～～い！」

美琴「ねえ、誰に手を振って・・・げっ!？」

美鈴「グットタイミングだったわね～～」

御坂ファミリーのお二人さん。なぜかこのタイミングで現れた！

美琴「なんであんたがいるのよ!？」

当麻「なっ!?!御坂!?!なぜここに!?!」

美琴「それはこっちのセリフよーーーー!!」

美鈴「うふふふ・・・当麻くんのご実家は実家のお隣なのよね」
「」

美琴「ちょ!?!なんでそれを言わなかったのよ!?!」

美鈴「え～～～だって普通に言うのはつまらないでしょ?」

美琴「この馬鹿母……」

仲良くケンカする母娘を不思議そうに眺める上条家の一同……しかしそこに空気を変える漢が一人……

刀夜「お出かけの帰りですか？なら、うちでお茶でもいかががですか？」

美鈴「あら、いいですね。お言葉に甘えさせていただきます」

詩菜「美鈴さんと……え……と、美琴ちゃんでしたっけ？」

美琴「あ……はい」

詩菜「遠慮せずにどうぞ。お入りください」

さすが上条夫婦、その場の空気を一瞬にして変えた。だが、当麻と美琴の空気は今だ暗い……

1時間後

当麻「はあ……なんで大人ってあんなに話好きなんだ？それに……」

はあ〜〜」

美琴「何私を見て、2度もため息してんのよ。」

当麻「いや、何となくしたくなった」

大人の空間から脱走した上条当麻は上条家の家を探索していた。美琴も一人でその場にるのが耐え切れなかったため、当麻に付いてきたのだった。

美琴「で？これからどうするの？」

当麻「そうだな〜ここには初めて来たし、家の中を探索するか」

美琴「あんたの両親がここにきたのは最近っついてわよね」

当麻「そうらしい。俺は詳しいことはわからんが、自分の家くらいは覚えておきたいし」

美琴「あ・・・あんた、記憶がないのよね・・・親に話さなくていいの・・・」

美琴は当麻が記憶喪失のことを知っていた。あの夜ときにはつきりしたのだ。暗闇の道で怪我のことを関係なく。仲間の助けに向かう上条当麻の本質と本心も・・・

当麻「言ったら悲しむだろ。それなら言わないほうがいいだろ」

美琴「でも」

当麻「俺はどれだけ傷ついていいが、他人が傷つくところは見たくないからいいんだ」

美琴「……………」

ガチャツ

当麻「ん？この部屋はまだ整理されてないのか」

美琴と会話しながら家の奥の部屋を開ける……中にはまだ整理されてないダンボール箱の山が連なっていた。

当麻「すげえ、ダンボール箱の山だな」

美琴「そうね。ホントに最近、引っ越してきたって感じね……そうだー！」

当麻「……………どうした？」

美琴「ねえ、ここにあなたの昔のことに関するアルバムとかありそうじゃない？」

当麻「ん……まあ、あるんじゃないかな」

美琴「なら、探さない？あんたの過去？」

当麻「え……」

美琴「べ……べつにあんたの過去に興味あるわけじゃないわよ！」

当麻「御坂……おまえ……」

美琴「な……なによ!？」

いきなり真面目な眼差しで美琴は少し赤面になる

当麻「そんなに俺の恥ずかしい過去を掘り出したいのか」

バチバチ!!

当麻「うお!？」

バキン!

当麻「凶星……かよ」

お約束の電撃にいつものように右手で回避する。長い付き合いのためか当麻は意外と冷静である。

美琴「ああ〜もつ、あなたは不自由と思わないの？少しでも昔のことがわかれば、あなたの両親を誤魔化しやすくなるでしょ！」

当麻「ああ！なるほど」

そんな考えが思いつかなかった記憶喪失の少年は平手に拳を叩き、納得する。

美琴「たく・・・にぶちん（でも、こいつの過去があるし・・・）」

理由はどうあれ、二人は部屋の中のダンボール箱の中を物色し始めてた・・・

数分後

美琴「なかなか見つからないわね」

当麻「まだ山（ダンボール箱）は半分も残っているな・・・正直だるい」

美琴「って、なんで私が本気で探して、アンタはやる気がないのよ！」

美琴が必死に探しているのに当麻はやる気なくダンボールの中身を探す……

当麻「お!？」

美琴「見つかったの!？」

当麻「こ……これは……」

美琴「なに?何を見つけたの!？」

何かを見つけたようだが返答がこないため、ダンボールの山裏にいる上条の所に行く……そこにはダンボールではなく長い木箱から何かを取り出した上条の姿があった。

当麻「これ……って……日本刀だよな……」

美琴「ちょっと!ちゃんと探しなさいよ!」

当麻「ん?ああ……アルバムは見つからなかったが、こんなの見つけた」

美琴「何?この古い木箱は……」

当麻「日本刀と同じ場所に置いてあった」

当麻の足元には日本刀が入っていたと思われる木箱ともう一つ、ものすごく古く鍵の掛かった木箱が置いてあった。

当麻「父さんが集めたお土産コレクション・・・にしてはかなり大切に保存されてたようだな」

美琴「へえ〜〜あんたのお父さんはそういう趣味してんの？」

当麻「まあ、夏のときの趣味の熱中ぶりには手が焼いたよ・・・色々と」

美琴「ねえ、その日本刀見せてよ。なかなかオシャレじゃない」

当麻「ちょっと待て・・・そう焦るな・・・って・・・うわ!？」

バキリ!

当麻「いてー！ー！ー！ー!」

美琴「ちょ!?!なに箱を壊してんのよ!?!」

美琴が当麻の持つ日本刀を無理やり取ろうとした瞬間、当麻は転倒してしまい、足元にあった鍵付きの木箱に頭を打ち付け、箱は簡単に碎け散った・・・

当麻「いたたた・・・あれ？なんだこれ？」

今まで封印されていたものが姿を現した・・・

美琴「なにかの巻物？」

当麻「え~~~~と・・・『上条家系図』・・・って、え~~~~
!？」

美琴「なんかすごいものが出てきちゃわね」

当麻「と・・・とりあえず、中を確認しよう!」

二人は恐る恐る、巻物を開いていく・・・巻物にはまるで地面に根を伸ばすような形で枝分かれをするご先祖の名が刻み込まれていた。

美琴「へえ~~~~あんたのご先祖さん、多いわね」

当麻「ええい、なんて長い家系図だ。俺って上条家の何代目だよ。わかりやすく代数を書いとけっつーの!」

ながいなが~~~~い家系図は数十メートルにおよびやっと、上条家を作った初代の先祖のところまでたどり着いた。

当麻「ふう~~~~やっと、初代か。さて、ご先祖様のお名前をはい

け……ん……ちよつ!? なんだよこれ!？」

美琴「どうしたの!? ちよつ!? え……!？」

二人はお互いに同じ反応をした。これを見て驚かないわけがない。

初代ご先祖……いや、上条家の総本山の名前が……『当麻』とクツキリハツキリと書かれている。

美琴「ちょ……これ何かの冗談よね?」

美琴はそれだけではなく。もう一つの名を見て、今まで味わったことのない衝撃を受ける……その初代当麻の妻の名前に『美琴』と書かれていたら、同じ名の人間が驚かないはずがない。

美琴「なんで……これって偶然にしては……ちよつと……
・あれ? 当麻?」

ガラ!

美琴「ちよつと!」

上条当麻「離してくれ! なんだか俺は死にたくなってきた!」

ちなみに現在上条たちがいる奥の部屋は実は2階部屋なのだ・・・
当麻はいろんな意味で現実逃避し始め、近くの窓を開け飛び降り自
殺しようとしたが、美琴に羽交い締めで止められる。

美琴「だからって飛び降り自殺なんてやめなさい・・・って、そ
れって、私と結婚したのがそんなにいやなのか。コラーーーーーー
ーーーーーっ!!」

バリバリバリ!!

当麻「ぎゃあああああああ!ふこっ~~~~~~~~だーーーー
ーーーー!!」

美琴の逆ギレで思いつきりの電撃を食らう上条当麻!

ちなみに上条がいきなり思い切った行動に出た理由は美琴という名
が書かれていただけではなく、その初代は妻が複数おり、かすれて
読み取れないが・・・

美琴

火

和

or などなど

身に覚えがある名前の部分と完璧な外人だが、なぜか知っている人物に近い名がズラズラと巻物からはみ出しそうに書かれている。確認できて数十人！まるでどこぞのお殿様！

まるで未来の自分が鬼畜道に落ちるような予感がして、現実から逃げたくなったというわけ……

数分後

当麻「ま……まだ痺れが抜けない……」

美琴「ふん！自業自得よ」

当麻「何怒ってんだよ」

美琴「べ……っ……に……」

美琴さんはまだ機嫌が治っていない。当麻はなぜ起こっているかは解るわけなかった……

当麻「え……と、初代の上条当麻は……誕生日は不明……死没が慶長3年8月 日……けいちょうって、いつだったけ？」

美琴「慶長は1596年〜1615年の元号のことよ。簡単に言えば戦国時代の末期か江戸時代の初期よ」

当麻「ふ〜ん、上条家は戦国時代からお家が始まったのか・・・」

美琴「ねえ・・・」

当麻「どうした」

美琴「あ・・・あんたって、もし、初代のご先祖さまと同じ名前の女の人と・・・け・・・結婚するって話になったらどうする？」

ドドドド！ガラー！ガシッ！

美琴「なんで返事じゃなく。行動で示すのよ！」

当麻「逝かせてくれーーーーー！！俺は鬼畜道に堕ちたくなーーーーー
いーーーーッ！」

言葉ではなく行動で示す上条当麻の飛び降り自殺は美琴の的確な行動により阻止することができたのだった・・・

また、数分後

当麻「まあ、そんなわけで探索はこれで終わり、下に戻るっぜ」

美琴「うん」

当麻「あ・・・あれ？」

美琴「どうしたの？」

当麻「ドアが開かない」

美琴「ちょっ！？それどういうこと？」

ガシャン！ガシャン！カチャツ！カチャ！

当麻「あははは・・・美琴さん？冗談抜きでいたずらは止し
ましよっや？」

美琴「そ・・・それはこっちのセリフよ！あんたこそ、窓は自動ロッ
クってことは先に言いなさいよね！」

当麻「え？窓にそんな高性能な機能はないはずだぞ」

さっきまで空いていた窓がいきおいよく閉まり、鍵が勝手に掛かっていった・・・当麻の言うとおりこの家には自動ロックという高性能なモノはこの部屋には存在しないのだ・・・

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ガタン！シャーーーーー！！！！

美琴「きゃあああああああ！！！！」

当麻「な・・・なんだ!?!」

いきなりカーテンが閉まり、部屋の中は暗闇になった。

ガタン！ガタン！・・・・・・・・

美琴「ね・・・ねえ・・・さっきいた場所から音が・・・」

当麻「か・・・確認するしかないよな・・・」

二人は先程いた場所に行ってみる。そのとき、美琴はガタガタ震えながら上条の腰に張り付き、どこぞの小動物のような感じをしていた。

ガタガタガタ・・・

音がするのは上条家家系図の巻物の木箱の横にあったという日本刀の木箱から音がしているのだ。
まるで外に出たがっているような音を立てていた。

美琴「ちよっと！危ないわよ！」

当麻「中を確かめないとわからねえだろ。もし魔術たぐいならすぐに対処出来るし」

美琴「魔術・・・つてなによ」

そんなこんなで当麻は日本刀を元に戻した木箱の蓋を開ける・・・
しかし、中身は今までと変わらず綺麗に保管されていた状態・・・

何も変わっているところはなかった

当麻「何もないな・・・」

美琴「あれ？蓋の裏に中貼ってあるわよ？」

当麻「はい？」

たしかにそこに紙らしきものが貼ってあり、何か書いてある。

当麻「ぶは！？行書体かよ！？か・・・解読できねえ～～～～」

美琴「たく、高校生なのに読めるように勉強しなさいよね。え～～～
くと」

封印を壊し運命を変えるそのお前！、お前は妖刀『幻破』を扱う資格ある。この俺、上条当麻に代わり戦国の世を駆け走り、上条の礎を築きやがれ！・・・ちなみに拒否権はねえ。もし、抵抗もしくは逃げだそうとするならお前とその周りのモノも一緒に吹き飛ばす！
ーーーーーす！

上条家

初代当主 当麻

「……………」

美琴「あ……あなたの先祖さまって……色々面白いこと書くわね……ってなにこれ！？行書体だけど、現代文！？」

当麻「とにかく、早くここから出るぞ。御坂！窓割っても壁ごと開けていいから早くここから」

美琴「そうね。色々やばそうね。新築した家を傷つけることになるけど」

当麻「構わない。学園都市第三位のレールガンの力を使ってでも逃げ道を作ってくれ！」

美琴「あなたの右手は使えないの！？」

当麻「ぜんぜん右手が反応しないだよ……！！」

美琴「仕方ない。ちょっと出力が高いから余波に気を付けなさいよ！」

バチッ！ バーーーーキン！

美琴「ちよつと！？なんでレールガンが使えない！？あ・あれー
ー！？電流が出せない！？」

当麻「まさか・・・この部屋全体が幻想殺しに似た空間になっ
てるわけ！？」

気づいた時にはすでに遅し・・・この部屋の鍵が全て締まった瞬間
からここは超能力や魔術が効かない結界になっていたのだ

「拒否権はねえと書いたはずだぞ」

美琴「ちよつと、なに変なことを言ってるのよ！」

当麻「おれじゃねえ」

「とつとと仲良くタイムスリップしやがれ！！」

その瞬間、部屋の中心にブラックホールみたいな穴が周りのものを
吸い込み始めた。

美琴「きゃあああああー！！」

ガシ！

当麻「御坂、絶対に手を離すなよ！」

美琴「分かってるわよ！だから、絶対に手を離さないでー！！」

吸い込まそうになった美琴をギリギリキャッチした当麻だったが、体勢的にかなり苦しい形となり、今にも吸い込まれそうだった。

ずる……

美琴「きゃあああああああ……」

当麻「みさかー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！」

とつとつ手が滑り、美琴は暗い光を放つ穴の中に吸い込まれていた。
……

当麻「チクシヨー！ー！ー！ー！ー！ー！」

漢、上条当麻！女の子一人を犠牲にしてまで逃げようと思わない。
当麻は自ら穴の中に飛び込もうとする。

「忘れ物だぞ」

当麻「うわ！？刀？」

「それはお前のモンだ。あっちでうまく使えよ」

上条の手に飛び込んできたのは妖刀『幻破』・・・そして、飛んできたところに誰かが立っていた。

当麻「あんたが俺のご先祖さんか！何でこんなことすんだ！」

「こいついう定めだ。まあ、適当に恨んでくれ」

当麻「くそ！御坂が吸い込まれていなければ、こいつの幻想をぶち殺せたのに・・・」

「・・・あ！言っておきたいことがあった。」

当麻「ん？」

「あのお嬢さんと将来のお嫁さんとお幸せに・・・後、子供いっぱい作れよ！」

当麻「てめえーーーーの幻想ーーーーぶちこwあああああああ

あああああー!!」

そして、上条も完全に吸い込まれ、穴は閉じていった……

「さて、戦国時代でもうまくやれよ……お二人さん……直に仲間が来てくれる……」

そして、ご先祖の霊の姿を消し部屋は元の形に戻っていった……

続く……

始まりの家系図（後書き）

今回は上条当麻が飛ばされて終わりました・・・

次回から本番！戦国時代に飛ばされた当麻と美琴！二人の運命はいかに・・・

では、次回も楽しみにしてください！

ご感想なども受け付けておりますので、気軽に思ったこと書いてもらえると嬉しいです！

協力

当麻「いたたた・・・こじこじだ」

辺り一面が樹に囲まれ林の中に上条当麻は倒れていた。

さっきまでダンボールの山が連なる2階の奥の部屋にいたはずだが・
・

当麻「あっ！そうだ。御坂！御坂はどこだ!？」

起き上がるとそこには御坂の影がなかった。あるのは飛ばされる前に先祖の霊から渡された細かい装飾が施された日本刀のみだった。

当麻「俺と違つところに飛ばされたのか・・・おーい、御坂！

ー!」

返事が返ってこない・・・どうやら、近くに居ないようだ。

当麻「どうするか・・・あ！そうだ。ケータイがあるじゃないか

！あいつとはペア契約でお互いアンテナ同士、だから通じるんじゃないか
・・・」

ケータイを取り出し、電話は試してみる・・・

当麻「お！繋がった！さすが学園都市製だ。性能がいいぜ！」

思ったとおり、電波は繋がった。しかし、なかなか出ない・・・

当麻「だめだ。電話に出ない・・・あいつになんかあったのか？」

ガサガサ！

当麻「！！」

突然の林の中から何かが動く音が響く、当麻は地面に落ちている刀を取り、そのまま構える。

当麻「誰かそこにいるのか！？御坂か！？」

声に気づいたのか。物音が近づいてくる・・・そして！

??「御坂？誰だよそれ？」

現れたのは学生服を来た男性だった。当麻は少し安心したのか、構えていた鞘付きの刀を下げる。

当麻「なんだよ。びっくりしただぜ。飛ばされたと言っても、結局戦国時代じゃなくて、近くの森林じゃないか」

??「お！お前もこの時代に飛ばされてきた口か！よかったぜ！こんな所で迷子なると思ったぜ！」

当麻「はい？今、なんて言いました？」

??「だ〜〜か〜〜ら〜〜戦国時代に俺以外で飛ばされてきた奴がいるって嬉しいって言うてんの！」

当麻「う・嘘だろ・・・ま・まさか、本当に・・・」

??「戦国時代だよ。」

当麻「ふ・・・」

??「ふ？」

当麻「ふ〜~~~~う~~~~だ~~~~!!」

??「うお!?!なんていう馬鹿声」

林の中でお決まりのセリフが響きわたる・・・

数分後・・・

当麻「へえ〜〜〜それであなたもここに飛ばされたんせうか」

??「ああ、俺の名は相良良晴だ。ちなみに俺は高校2年の17歳だ」

当麻「先輩ですか。俺は上条当麻です。高校1年で15歳だ」

良晴「んじゃ。当麻でいいんだな」

当麻「はい、好きなように相良先輩」

良晴「よしてくれ。俺は先輩と言われる立ちじゃない」

当麻「では良晴と呼ばさせていただきます」

良晴「OK!」

自己紹介の次は現在の状況確認と今後の行動について、相談中・・・

良晴「その御坂という子も同じ世界から飛ばされてきたのか」

当麻「そうなんだが、ケータイにも出ないから無事なのか。わから

ないんだ」

良晴「ん？ここは戦国時代だぜ？ケータイが使えるわけないだろ」

当麻「あいつと俺のケータイは特別な機能がしてありまして、どこに行っても連絡が取り合えるようになってるんですよ」

良晴「いいな〜俺もそんな高性能なケータイが欲しいぜ」

当麻「でも、一応はケータイで連絡が取り合えるのでメアド交換だけはしておきますか？」

良晴「お！そうだな。どんな所でも連絡が取り合えるのはこの時代ではできないからな」

主人公達はお互いのメアドと電話番号を交換するし、繋がるか確認した後、話を戻す。

当麻「それで、これからどうしますか」

良晴「それなんだが、今この下の方で戦が行われているんだ」

当麻「まじかい・・・ならここから離れますか」

良晴「いや、離れるんじゃないかって参加する」

当麻「なっ！？正気かよ！？」

良晴「ああ、正気だよ」

良晴の血迷った発言に当麻は驚く

当麻「戦に参加してどうするんだよ」

良晴「戦って功績を立てて侍になり、俺は大名になる！」

当麻「ちよっ！？大名！？」

良晴「ああ、俺はどうしてもならなきゃならないんだ」

良晴の話では、良晴は戦の中に放り出され、絶体絶命の所を木下藤吉郎という足軽に助けられたことが始まりだという

当麻「木下藤吉郎・・・あれ？よく歴史漫画の主人公で出てくる後の豊臣秀吉！？その人はどこに！？」

良晴「・・・死んだよ。流れ弾に食らってな・・・」

当麻「まじかよ」

そして、良晴は藤吉郎の夢を引継ぎ、天下の大大名になると約束して、安らかに木下藤吉郎は永遠の眠りに付いた・・・

そう、良晴の行動は自分の存在のせいでのちの英雄を殺してしまつた償いなのだ。そのためにも良晴が豊臣秀吉としてこの時代で生きていけないと決意したのだ。

良晴「だから、頼む！俺は藤吉郎のおつちゃんの夢を叶えてやりたいんだ！俺はある程度の知識だけで実戦はないんだ。二人でならこの戦国の世を切り抜かれる。だから・・・」

当麻「・・・よし、分かった！俺はアンタに協力するぜ！どの道、どこも行くところはないし」

良晴「ヨッシャーーーーーー！心強い仲間が増えた！五右衛門~~~~！こつちおいで~~~~！！」

サツ！

五右衛門「おそばに・・・」

良晴「紹介するよ。俺の仲間の蜂須賀 五右衛門だ。三十文字以上の話をするとかっこいいやつだ」

五右衛門「む！相良氏、あまり人の弱点を言わないでほしゅいでこじやる」

「「あ・・・噛んだ」」

五右衛門「む・・・」

見かけが小学五年生で忍者の格好した少女・・・蜂須賀 五右衛門元は藤吉郎の部下だったが死亡してしまい、代わりに良晴と契約し部下となっている。見かけによらず、隠密と戦闘能力が高く、今の良晴には必要不可欠な存在だ

当麻「俺は色々と修羅場を経験しているし、実戦にも自信がある。でも、人殺しはパスな」

当麻は学園都市での色々な事件で修羅場には慣れている。そのため、少しのことでは動じない。ただし、今回は幻想殺しが役に立つことはなさそうだ。

良晴「ふむ〜そうだな。人殺しは極力避けたいな・・・さてどうするか」

五右衛門「相良氏、織田側が押されておりますよ」

良晴「なんだって!？」

現在の戦の状況では、良晴達が増勢する予定の織田軍が押されており、本陣に今川軍が奇襲がかけられていると報告が入る。

良晴「ふふふ・・・当麻、どうやら初陣は人を殺さないで済みそう
だぞ」

当麻「おう、そうだな。人助けって方がしっくりくる」

五右衛門「相良氏、上条氏、出陣でございますか？」

良晴「ああ！では、俺達の雇い主の所に向かうか！当麻！」

当麻「了解だ！」

良晴はそこらへんで落ちていた槍を拾い。上条は持っていた刀を握
る。

そして、二人は織田軍本陣の救援に急行するため、全速力で戦地に
赴くのであった・・・

続く・・・

協力（後書き）

当麻と良晴が協力、いざ、行かん戦地へ！

今回は織田軍の危機を救うべく当麻達が奮闘します！

果たして、漢達は織田軍大将を救い、無事に織田軍に士官できるか・

・

では次回も楽しみしてください！ご感想などもお待ちしております！
ます！

出会い？（前書き）

早速、本編に突入します！
では、おたのしみください！

出会い？

当麻と良晴は急ぎ織田本陣に急行していた。

思ったより遠くなく現在地から1キロから2キロ付近にあり、林の中を駆け抜けていけばさほど時間はかからない

当麻「本陣が見えてきた！良晴、ここからが正念場だな」

良晴「おう！武者震いが止まらないぜ！」

当麻「やめんのなら今のうちだぞ？」

良晴「冗談じゃない。今の好機を逃すと俺の出世街道が閉ざされちゃう」

当麻「了解、もう少し急ぐか（俺も腹を括らないと・・・）」

二人はさらに足を早めて目的に向かう。すぐ横では物凄い掛け声と異なる旗がぶつかり合い、どちらかが倒れる・・・つまり戦場なのだ・・・その様子を見て当麻は今まで乗り越えてきた修羅場とは比べ物にならないと思っていた。学園都市で超能力者や魔術師との一騎打ちではない。まさに戦争・・・命の奪い合いだと言うことを・・・

戦の様子を見ると馬に乗った若い鎧武者が見えた。

鎧武者「皆のもの！本陣が奇襲をかけられてる！急ぎ本陣へ戻るぞ

「！」

その現場指揮をしている鎧武者の凜とした声が響きわたる。だが、部隊は混乱しているため指示が回らない。それに鎧武者も自分のことで精一杯で部隊を再編成できないでいた。

当麻「……………良晴、先に行ってくれ。俺はあっちの救援に向かう」

良晴「お……おい！？当麻」

当麻「助けたらすぐにそちらに向かう！だから、織田信長のことはお前に任せた！」

良晴「……………分かった。死ぬなよ！」

当麻「ああ！本陣で会おう」

上条は林から抜け出し、戦の嵐の中に突っ込んで行き……………

良晴は林の中を直進し急ぎ本陣に向かった……………

当麻サイド

鎧武者「足軽ども！何をしておる。早く体勢を立て直さぬか！早く姫様の所へ戻らなければならぬのに」

足軽A「しかし、柴田様。我々の隊はほぼ孤立しており、敵の本隊を止めているだけで精一杯です」

足軽B「柴田様！本陣が危機！至急お戻りを！」

鎧武者「おのれ、この柴田勝家。一生の不覚」

今の戦況は会戦時、優勢だったが前線を伸ばしすぎて退路のことを忘れてしまい、本陣を無防備にしまった。それだけではなく敵に包囲され、身動きが取れない状態が続いていた・・・

鎧武者「誰でもいい。私に従って来れる者だけ、従ってこい！」

敵足軽「空きあり！」

鎧武者「っ！」

敵足軽の槍による不意打ちにより、被っていた兜が弾き飛ばれてた！深く被っていた兜の中から美しいポニーテールの黒髪で整った美少女の顔が現れた。

女武者「おのれ！」

ザシユツ！

敵足軽「ぎゃああああ」

手に握られていた刀で容赦ない斬撃が繰り出され、敵足軽はつめき声を上げながら倒れた。

足軽A「柴田様、お怪我は？」

女武者「た・・・大したことはない・・・」

足軽「ぜ・・・前方に敵の種子島！！」

女武者「なに！？」

目の前草むらに射撃体制が整った火縄銃の部隊が展開し、こちらを狙っていた

敵隊長「撃ち方・・・」

その瞬間、鎧を来た美少女の時間が止まった・・・こんなところ

で死ぬのか・・・こんな所で朽ち果てるのか・・・と思いながら人生の思い出が走馬灯のように浮かんでいた

女武者（こんな・・・ところで・・・死にたくない）

敵隊長の射撃合図が出ようとしたその時！

当麻「うおおおおおおおー！！」

バキ！ドカ！

敵隊長「ぐは！？」

敵火縄銃隊の横腹に上条当麻が乱入した！刀は鞘から抜かず、敵隊長の顔面に叩きつけ、余った右手でトドメのアップーが炸裂し、敵を戦闘不能した。

敵足軽「隊長！？」

一瞬の出来事に部隊は混乱する。だが、当麻の攻撃は止まらない！

当麻「覚悟はいいな！てめーら！」

バキ！ドカ！バシ！……

右手と鞘付きの刀を棍棒のように扱い、敵の顔面などの急所を狙い戦闘不能状態にしていく。指揮系統を失った敵部隊は呆気なく当麻の手で戦闘不能になった。(ノーキルで)

敵足軽「ひ……ひいいいいい！？ば……化け物め！」

当麻「しまった!？」

別の火縄銃を持った足軽が当麻の背中を狙っていた。今の距離だと人を殺すほどの殺傷力はある。

敵足軽「死ね—————!!」

当麻「くそ、避けきれねえ」

回避不可の鉄砲の引き金が引かれそうになり当麻、絶体絶命！

女武者「後ろから狙うとは卑怯だぞ！」

ザシュッ！

敵足軽「ぎゃああああ」

当麻「！！」

鎧を着た女武者が背後にいた足軽を切り捨てる。当麻の危機は回避された。

当麻「助かった。はあ〜」

女武者「背後くらい気を回せ。バカ者・・・ところでお前は誰だ？家の足軽じゃないな」

当麻「ちよつと！？刀をこっちに向けんな！あぶねえじゃないか！」

女武者は容赦なく刀を当麻に向ける・・・しかし、すぐに刀を鞘に戻し、当麻に背を向けた。

女武者「今、お前にかまっている時間はない。急ぎ本陣に・・・」

ドーン！

女武者「うお!?!」

鉄砲の轟音と共に女武者が乗っていた馬が倒れて放り出されしまう。

女武者「クツ……!!」

ドン!ドン!……

間髪入れず、こちらに向けて撃った第二射・三射の射撃音が響く・
・今さっき、見知らぬ男に命を助けてもらったのに……ここで
命を散らすなんて……

女武者「助けて……」

女武者は今度こそ助からないと思い、最後に本音と涙が流れる。覚
悟を決めた……しかし、そこに!!

当麻「助けるに決まってるんだろ!」

女武者「え!?!」

当麻「うおおおおお!間に合え!……!……!」

いきなりなこと驚く女武者、知らない男の温もりが鎧を通して感

じてくる……

上条は女武者を覆い被さるように庇う。数発の弾が当麻の頬や肩を掠める……だが、

当麻「がああああああああああ」

女武者「お……おい!？」

一発の弾が当麻の背中に命中した。鉛弾は肉をえぐり鮮血が流す……
・・当麻は負傷したが女武者は無傷だった。

女武者「鉄砲隊!あそこにいる敵に撃てー！ー！ー！ツ！」

味方の鉄砲隊が敵の狙撃部隊を殲滅していく。当麻は後方に移されたが意識が戻ってない……

女武者「おい!しっかりしろ!おい!」

返事が返ってこない……いや、その前に息をしていない。

女武者「おい!誰か!蘇生法知っている奴はいるか!」

足軽C「あ……とある南蛮人の商人からきいたのですが……」

女武者「知っているのか!やり方を教えろ!後、手伝え!」

足軽C「あ……柴田様、その前に止血を……そうでないで蘇生法ができません」

足軽の適切な処置により、当麻の止血は無事を終わった……残るは問題の蘇生法はである。

女武者「おい、蘇生法はどうやってやるんだ」

足軽C「まず、鼻をつまんで、その後、口と口を重ねて空気を流し込むのです」

女武者「口と口……なっ!? それでは接吻ではないか!」

足軽C「いえ、これが蘇生させるのに持ってこいと言っておりましたので」

女武者「で……できるか……!! 私が見知らぬ男に唇を明け渡せとも言うつのか!」

この女武者は生まれて18年、接吻などしたことがない。そしてかなりの初心である……

足軽B「柴田様、その方は2度もあなた様をお救いした命の恩人です。それを見殺しにするなど、言語道断ですぞ!」

女武者「お……お前は足軽のくせに何を抜かす! 控えろ!」

足軽B「申し上げますが、柴田様とあろうものが恩を仇で返される
お方ですか！」

足軽A「それに命の恩人を接吻くらいできやあー！きやあー！騒い
で恥ずかしくないのですか！」

女武者「お・お前たち、敵はどうした！まだ戦の最中だぞ！」

足軽A「敵は撤退しました。残っている戦はあなた自身の戦のみで
すぞ！」

女武者「え……？」

よく見ると部下（足軽）達が当麻と女武者を囲んで待っていた。
全員、まだかまだかと待ち構えていた……

足軽A「さあ、柴田様！どうかご覚悟を！」

女武者「いやだ。いやだーーーーー！！絶対いやだーーーーー！！」

足軽B「往生際が悪いですぞ！」

足軽A「おい、誰か。本陣に行って報告してこい！柴田様が命の恩
人を見殺しにしたと」

女武者「っ！？貴様ーーーーーッ！！」

足軽A「それが嫌なら、お早く・・・急がないと取り返しがつかなくなりませゆえ」

足軽Aに呼応するかのように周りの足軽たちも「やーれ！やーれ！」と催促をかける・・・女武者にとってはとんだ晒し者だった。

女武者（だ・・・だめよ。落ち着きなさい。六・・・いや、柴田勝家・・・こんなところで接吻など武士の名折れ・・・でも、ここでこいつを助けないと私の信頼が・・・）

足軽C「し・・・柴田様・・・もう一刻の猶予もありません」

女武者「なら、お前がやれ！」

足軽C「ま・・・まこと申し上げにくいのですが・・・この蘇生法は女ではないと意味がないのです」

女武者「な・・・なんだとー！ー！ー！ー！つ！？」

足軽達（くすくす・・・まんまと騙されてるwww）

ちなみにこの女武者・・・六・・・いや、柴田勝家は単純で脳筋な乙女で人の話に意外と騙されやすいのだ・・・

足軽「柴田様——！——！こは気合ですぞ！」

足軽「女は度胸です！」

足軽達「「や——れ！や——れ！」

降り注ぐ催促の嵐・・・そしてやっと決意を固める。

女武者「よし、わかった！私はやる！お前たち、このことは他言無用だぞ！」

足軽「「お——！——！——！——！」

女武者（ああ・・・こんなことで私の純潔が・・・）

いやいやでも、やらないと示しがつかない。そして、仰向けに寝かせられている上条の鼻をつまみ・・・唇と唇が・・・

足軽達「「おおおおおおお——！」

女武者（うつつ・・・お母様・・・私・・・汚されてしまいました）

完璧なマウス・ツー・マウス！昔だと正式な接吻に近い！

まるで白雪姫にキスする王子のように・・・いや、逆だ！逆にキスされている！

足軽達「」「わあああああああ！」「」「

いいぞー！ー！ー！ー！！

それでこそ、柴田様だ！

あなた様は女だ！立派な女ですよ！

わああああ！！家の嫁に来てくれー！ー！ー！！

つつか、羨ましいぞ！コンチクショー！ー！ー！ー！！

などなどの歓声上がる。最終的に三度の人工呼吸法により、上条は一命を取り留めた。

女武者「う・・・うわああああああん！わたし・・・わたし・・・汚されてしまった・・・三度も！うああああああああん！」

歓声の中、一人の乙女の泣き声が響く。しかし、数的に足軽の方が多いため、その泣き声もかき消されてしまう。

女武者「うあああああああん！！・・・え？」

涙でくしゃくしゃになっている顔に優しい手が触れる。

当麻「泣く・・・なよ・・・可愛い顔が・・・台無しだぜ・・・」

女武者「!！」

優しく微笑む少年の顔に少しドキッ!としてしまふ女武者のこと柴田勝家!当麻が目を覚ましたので何か言おうとしたが・・・

パタ・・・

意識は戻ったが再び眠ってしまう・・・今さっきの行動に女武者は・・・

女武者「うああああああん!なぜか知らないけど、慰められた~~~~~!でも憎めないのはどうして~~~~~!うああああああああん!」

この大泣きは止まることはなかった・・・足軽たちの馬鹿騒ぎも今少し収まる気配がなかった・・・

続く・・・

出会い？（後書き）

いや〜〜原作知っている人ならわかりますけど、今回の戦闘は上条当麻の乱入により戦闘状況が一変しました。

主人公が増えると歴史も変わるんですね〜って勝手に自己解決w

w
w

ちなみに気づいていると思いますが、上条さんは勝家にフラグをつ立て、百人乗っても大丈夫ってくらいの土台を作りました・
・なんのフラグの城を建て始めてんだよ！

では、次回は良晴サイドから始まります！では次回もおたのしみに！

ご感想などもお待ちしております！

出会い？

敵武将「見つけたぞ！大将だ！全員討ち取れー！ー！！」

側近達「命に変えても姫様をお守りしろ！」

足軽達「「おおー！ー！ー！ー！！」「」

本陣では敵の奇襲により、総大将 織田信長？が危機に瀕していた。敵は陣内まで進行し、総大将の目前で膠着した乱戦が繰り広げられていた。・・・その陣内の奥に総大将らしい少女（信長？）が椅子に座り威風堂度を構えていた。

敵足軽「総大将とお見受けした！その首、貰い受ける！」

信長？「・・・・・・・・」

一部の敵が突破し、総大将の座まで到達した。しかし、信長？は火縄銃を担いで座っているだけで身動きが一つも取らない。

敵足軽「覚悟ー！ー！ー！！」

もはや絶体絶命と思われたが・・・

良晴「ちょー！ー！ー！と待った！この相良良晴がいる限り、総大将には指一本も触れさせないぜ！」

足軽達が総大将に襲いかかろうと構えたとき、本陣救援に向かった良晴が到着し、ギリギリのところまで間に合った

良晴「おらおらおらー！ー！ー！！」

適当に持っている長槍で敵を牽制するが相手は全く動じない。

敵足軽「こいつ、ど素人だ！」

敵足軽「困んで叩け！一気に仕留めろ！」

良晴「うお！？一瞬にしてバレた！」

敵足軽達は総大将より目の前の良晴に注意を向けた。それにより信長？の安全は確保された

敵足軽「このやろ！」

良晴「よっと！」

敵足軽「死ねー！ー！ー！」

良晴「ほっ！」

敵足軽「せい！」

良晴「当たるか」

敵足軽「いやああああ！！」

良晴「出直せ」

四方向から槍と剣の波状攻撃を難なく回避する。まるでスパロボのひらめきが継続で発動しているようだった。その回避率は上条当麻を凌駕していた！

良晴「ハハハ！そんなへなちよこな攻撃当たるか！俺がいた世界では『球よけのヨシ』と呼ばれていたんだぜ」

『球よけのヨシ』とは良晴の現世で呼ばれていた異名で学校内のドツチボールで絶対回避、被弾率ゼロの実績持つことから呼ばれていた。しかし、回避行動に優れているだけで肝心の攻撃はド素人・・・そのため、だんだん追い込まれていく。

良晴（まずいな。このままだと殺される）

五右衛門「お助け致す！」

良晴の周りに煙玉が放たれ、周囲の視界が白くなる

敵足軽「ぎゃあああ」敵足軽「ぐええええ」敵足軽「ぐああああ」
・
・
・

煙晴れた時には敵足軽達は殲滅されていた。五右衛門の隠密攻撃によるモノで良晴は全く手をだしていなかった。

良晴（五右衛門・・・助かったぜ）

その場にはいない五右衛門に感謝する良晴。戦が終わったら何かしてやらないと報酬のことを少し検討する。

その間に本陣に奇襲をかけてきた敵は殲滅された。前線の方では兵士が勝どきを上げているのか。大きい掛け声が聞こえてくる・・・空耳なのか。大泣きする女の子の声が聞こえてくるのが気のせいだと適当に流す。

信長？「アンタのおかげで助かった。一応お礼は言っとくわ」

良晴は急ぎ振り向き片膝をつき、頭を下げる。

良晴「いきなり現れ、厚かましいですが、信長様！私を家臣してください！」

ガンー！

良晴「ぶは！？」

頭上から足が降ってきた。いきなりのもので良晴は反応に困る。

信長？「誰が信長様よ。私はの・ぶ・な。自分のご主人の名も覚えられないの？馬鹿じゃない？」

良晴「はあ！？なんだって！？」

冷静になって考える。さつきから信長だと思っている人物の声はまるで同じ年の女の子の声……しかも、信長ではなく、『のぶな』という名前……

恐る恐る上を見ると……茶髪がかつた髪にだたらめな茶筥に結っており、甲冑は着けておらず、太刀と脇差わきざしをわら縄で巻き、腰にはひょうたんをぶら下げ、そして腰と足を覆う袴の上には虎の皮を腰巻きのように着こなしていた。

この格好はどう見てもよくモデルとされる織田信長の格好である。

だが、決定的に違つところは……

信長? 「何ジロジロ見てんのよ。わたしは織田信奈よ! 尾張の守護大名、織田の当主よ!」

良晴「え〜〜〜〜〜〜〜〜!?!」

女ということ、傾奇者の独創的な衣装に膨らみのある胸にみせブラ・
・整った顔立ちに瞳が少し大きめ・・簡単に言つと美人!
良晴は(うわ・・少しかわいいかも)と思つてしまった。

信奈「で? あんたの名は?」

足は退かしたのはいいが、次は口に火縄銃の銃口を押し込み、言いたいことが言えない。

良晴「さはら、よひはる 解説(さがら、よしはる)」

信奈「さ 中略 る? ・ ・ ・よし、あんたの名は『サル』よ!」

良晴「かー! ペ! 何がサルだ! 俺には相良良晴という名があんだよ!」

自力で口の中の銃口を吐き出し、信奈に喧嘩腰で対峙する。

信奈「なによ。サルのかせに言葉が達者ね。よし、決めた。飼ってあげるわ」

良晴「何が飼ってやるだ！俺は人間だ！サルじゃねえ！」

信奈「キーキーうるさいわね。ほら、新しい飼い主の言う事聞きなさい！」

良晴「ちよっ」

良晴を踏みつけようとしたが回避される。

信奈「ちよっと、何勝手によけてんのよ！潔く踏まれなさいよ！」

良晴「ふざけんな！俺はどこぞのM男か！俺は踏まれて喜ぶ男じゃねえ！」

信奈「何、意味不明なことを言ってるのよ！サル語？サル語なのね。あんたはサルよ。サル決定！」

良晴「俺はサルじゃねえって言ってんだろ！後、飼うじゃなくて雇うだろ！言葉が違うだろ！」

信奈「サルは飼うものよ。雇うものじゃないわ。さて、戦も終わつたし遊び行きましょうか」

良晴「おい！まだ、話が・・・ぬおおお！？」

油断してしまい、首に縄がかかり引つ張られ、どこぞへと連れて行かれていった……

今川軍……松平軍本陣

元康「ああ、負けちゃいましたね……せつかくの点数稼ぎだったのに……」

戦の相手の今川軍の前線を担当していたのはこの松平元康……のちの天下統一し、徳川幕府を開く徳川家康のはず

だがこの時代……いや、この世界の松平元康も織田信奈同様、女である！見かけはまだ、小学生くらい（無印　なのは並？）でたぬき耳とタヌキ尻尾を付けメガネをかけている。（声：田村ゆかり）

半蔵「失礼……主、残念ながら背後からの奇襲作戦及び前線の陽動作戦は失敗に終わりました」

元康「そうですか……そう簡単に勝ちを譲ってくれませんか……」

今回の戦は織田軍の勝利した。だが、実際は当麻及び良晴の乱入により戦況が傾いたのが大きかったのかもしれない。

元康「さて、戦が終わりましたので、次はあなたの番ですよ……？」

美琴「……………」

元康「あなたはどこから来た乱波（忍び）ですか……？正直にこたえてください……い」

美琴「さっき言ったでしょ！私は乱波じゃないし、この時代の人間じゃないって！」

先にこの時代に飛ばされてしまった御坂美琴が、落ちた場所が松平軍の本陣前で呆気なく拘束され現在に至っている。

元康「そうと言われても……実際証明できるモノがありますか……？」

美琴「あるわよ！だから、この縄を解きなさいよ！」

まあ、問者と疑われれば手足を拘束されるのも無理はない。元康は拘束を解くように命じる。

美琴「ほら、これとか今の時代で見たことないでしょ！」

出したのはカエル型ケータイだった。たしかに戦国時代にそんな精密機械はそんざいしないが……

元康「それで？それがどういうモノなんですか……？」

美琴「これは携帯電話と言って持っている人同士で連絡が取り合える機械よ」

元康「へえ……便利なカラクリですね……」

元康は美琴が持っているケータイに興味津々！それよりカエルのデザインの方に興味津々！

美琴「ん？着信履歴？メッセージコール？あいつから？」

ケータイを開き始めに目に写ったのは当麻からの着信履歴とメッセージだった。

そのとき、美琴は判断ミスをしてしまう……元康に自分が未来から来た人間だと理解してもらったためにこのメッセージを大音量で流してしまうことを……

ピッ！

『おい、御坂大丈夫か！もし、このメッセージが伝わったら、すぐに返事をしてくれ！ちなみに俺はもう一人、俺たちと同じ時代から飛ばされてきた奴と共に苦戦している織田軍を救援しに行くところだ！もし、織田軍が俺達を保護してくれる場合は俺はそこにいる！居場所は随時、連絡する。お前も無事でいてくれ！』

以上でメッセージは終了します・・・と上条の伝言はそこで終わる。

元康&半蔵「……………」

美琴「あは・・・あははははは・・・あら、どうしよう。私の連れがまさかの敵側につくなんて。アハハハ」

美琴は苦笑して誤魔化そうとする。それに答えるように元康も笑顔で返してくるが・・・その背中には何か黒いモノが・・・

元康「半蔵……………」

半蔵「……………」

元康「やつちやえ……………!!」

半蔵「御意！」

美琴「ちよつと!?!私は本当に乱波でも患者でもないから・・・ね

え・・・ちよ・・・ちよっと!？」

もう時は遅し、あのメッセージを流してしまった時点で美琴の運命は決まっていた。

元康「捕まえちやえ〜〜」

美琴「ちよ・・・やめて・・・きゃあああああああ!！」

一瞬の抵抗も出来ずにぐるぐるに縄に巻かれ、どこかに運ばれる御坂美琴・・・彼女の運命はいかに・・・

続く・・・

出会い？（後書き）

さてさて、飛ばされた方々は色々な状態になってきました。

今回は上条が行方不明となった現在の状態でほかのヒロイン達が登場の予定！

前回は感想が少なかったので、何か意見とかほしいな~~~~~

では、次回も楽しみにしてください！

神隠し捜索？（前書き）

今回は上条が消えて1週間が過ぎた世界の話です。

ではではー！

神隠し搜索？

上条当麻及び御坂美琴が戦国時代に飛ばされて1週間後の現世・・・

アナウンサー『神奈川県で起きた家で突然の男女の神隠し事件が起きて一週間が経ち、未だに事件の真相は掴めておりません』

刀夜『あの時、私たちは雑談しているとき、当麻は知らないうちにリビングを出た時に姿が見えなくなってしまっただけ・・・』

静菜『当麻さん達は家から出ていませんし、いったいどこにいったのでしょうか？私には考えられません』

美鈴『みことちゃん～～～ん！いったい何処に消えちゃったの～～～！早く帰ってきて～～～うわ～～～ん』

警察『家の中を搜索しましたが家から人が出入りした形跡もなく、学園都市の超能力者の能力行使した形跡すら見つけません』

アナウンサー『以上でニュースを終わりにします』

ブッン！（テレビが切る！）

ロンドン・・・イギリス清教 女子寮

神裂「上条当麻が消えてもう一週間ですか」

アニメーゼ「あの馬鹿は一体どこに消えたです。私たちをこんなに心配させて！」

オルソラ「もしかしたら、ローマ正教の刺客に襲われたのではございませんか？」

神裂「そ・・・それはないのではまさか実家で偶然というのはありえないのでは」

主に上条に恩があるもの同士、とある個室で緊急会議は行われていた。

でも、出席しているのは頭の固い御仁達とマイペースなシスターのみだが・・・

??「動くが遅すぎるぜよ。ねえちん達」

神裂「！！誰だ！」

土御門「土御門元春ぜい！足のとろいねえちん達のために助太刀にきたにゃあ」

突然、天井から金髪のサングラス・・・上条当麻の腐れ縁の土御門元春が現る！この登場に女性陣は意外と冷静・・・

神裂「土御門、ここは女子寮です。男性のあなたは立ち入り禁止区域です」

アニメーゼ「あんたさんは命はいらないようですね」

オルソラ「あらあら、今の女子寮には私たちと数人しかいないことに忍び込むなんて、土御門さんってエッチな人ですね〜」

全員それぞれの獲物を持ち、神聖たる女子寮に侵入してきた男をいまここで抹殺しよう構える。

土御門「ちょよ！？待てにゃ！俺はねえちん達がいつになっても動かないのを心配して見にきたんだぜい？」

神裂「私たちが・・・動かない？」

土御門「そうだにゃ！かみやんが行方不明になってもう丸々一週間！学園都市の連中や天草式とかはもうとっくに動き出しているぜい」

神裂「なっ！？なんですって!？」

土御門「天草式的面子は一々、支持を待たずに自ら行動し始めてるぜ。ねえちゃんがいつに立ってもかみやんの搜索指示を出さないから、建宮が天草式総動員でかみやん搜索のため、とっくのとうに日本に向かったぜい」

アニエーゼ「あららら・・・そちらさんの連中に見捨てられちゃったようですね。まあ、ドンマイです」

苦笑しながら神裂を慰めるアニエーゼ・・・だが土御門の話は終わってない。

土御門「そういえば、天草式が出立した後、アニエーゼ達の面々もすぐに出立したぜい」

アニエーゼ「ブーーーーー！な・・・なんですって!？」

口に入れたお茶を吹き出し驚くアニエーゼ！まあ、自分のシスター部隊が勝手に行動すればまあ仕方ない。

土御門「まあ、かみやんにみんな恩がある（個人的なモノも含む）からにや～～少しでも恩を返したくって、天草式とどっちが早く見つけられるか競争しているぜい。物量的には252 1（アニエーゼ）名のシスターが圧倒しているだが、質的には天草式の521（神裂）名で情報収集とかがうまいから面白い張り合いがずつとつづいているにや～～」

ケタケタと笑う土御門、その話を聞いてまんざらでないトップに立つ2人・・・

神裂「私……女教皇に戻ってまだ、みんなから信用されていない
のですね……」

アニーゼ「最近、ルチアとアンジェレネがどこかに出かけちまっ
たり、周りのシスターたちもやけに休暇が多いと思っただらそう言う
ことだったのですか」

自分の指揮力の無さに落ち込む2人……そこをマイペースな
オルソラが慰める。

そして、二人が落ち着いた時、立ち上がり部屋のドアを開け……

オルソラ「では、私も行ってきますのでごさいます」

神裂&アニーゼ「はあ!?!」

オルソラ「実は私も天草式の皆さん達と一緒しようと思ひまして、
日本行きのビザを準備してましたのでごさいますよ……。でも、神
裂さんとアニーゼさんを二人だけにするのはなんだか可哀想だっ
たので出立を延期にしていたのでごさいますよ……」

神裂「あ……あなたもそちら側だったのですか!」

アニーゼ「私たちが真面目に仕事してるのにその仕事をほっぽり
だして行くつもりだったのですか!」

オルソラ「あらあら、人を救いに行くことはシスターの大切なお仕

事でございますよ〜?」

神裂及びアニエーゼ「それは都合のいい言い訳です!」

マイペースなボケに真面目すぎる2人は鋭いツツコミを入れる。

土御門「んじゃ、オルソラ。もうお前は準備出来てるってことではないのかにや〜?」

オルソラ「はい、女子寮の方はおふたりがやってくれそうなので私も日本に向けいきますのでございます」

神裂及びアニエーゼ「はい!」

オルソラ「では、私は日本に行くのでございますのでおふたりは仲良く後のことはおまかせいたしますのでございます。では」

土御門「んじゃ、ねえちん!かみやんのことを任せろ!ちやんと見つけてきたら今までの恩を更にグレードアップした墮天使メイド服をきて、かみやんに一日ご奉仕してもらうぜよ!後、アニエーゼ!お前の部隊のシスター達がかみやんを一番先に見つけられたら、おまえは俺が用意したメイド服を着て、かみやんにあんなことしたり、こんなことしたりと色々のご奉仕させるとシスターの方々が言ったぜ!」

神裂「な！？ちよつと！土御門！」
アニメーゼ「待つのです！」

ドアの目の前にはいつの間にか旅行用のキャリケースが置いてあり、オルソラはゴロゴロ引きながら女子寮から出ていき、土御門も姿を消していた……

寂しく残された二人は一度顔を合わせると……

神裂「い……いや……………！また、あの時の再現を繰り返せというのですか……………！あのことを根に持っているのに……………」

アニメーゼ「あいつら……………！私を置いてきぼりした拳句、そんな死にたくなるような屈辱を味あわせようというのですか……………！」

今になってはもう遅い。準備も何も用意しておらず、女子寮の留守番まで押し付けられてしまった……完全に打つ手なし

アニメーゼ「こうしてはおれんです！私たちも急いであいつらと合流するのです！」

神裂「ですが、今私たちが女子寮を去ったら、あとはどうするのです！？」

ガチャッ！

シェリー「あれ？おい、おまえらこんなところで何を？」

次の瞬間、二人は目付きが変わる。そして、シェリーに間髪も入れずに接近する！

神裂「いいところで帰ってきてくれました！」

アニメーゼ「これから私たちは少し長い間女子寮を出るんで留守番をお願いするのです」

シェリー「あ・あ、別に構わないけど」

戸惑いながら承諾する。二人は猛烈ダッシュで自分の部屋に駆けはしり、荷物をまとめるのであった……

シェリー「っていうか。私の出番はこれだけかよ」

まあ、シェリーはクロムウエルは上条とは敵同士だった関係だったし、これといって関わりがない……そのため、ながいなが〜いお留守番で出番はないのかもしれない……

数時間後……空港

神裂「チツ！今日の日本行きは乗れませんでしたか！」

アニメーゼ「まあ・・・しょうがないのです・・・でも、その大きい箱は何ですか？」

神裂「私の友です！」

アニメーゼ「あゝゝ！なるほど」

大きいダンボールの中身・・・ファンの方々はよく知っているあれです！

神裂「旅客機がダメなら、あれに乗るしかないですね」

アニメーゼ「あれ？」

神裂が指の先には一般的な大型旅客機より一回り大きいをした飛行機・・・それは

神裂「あの超音速旅客機で学園都市に行き、そして、神奈川県の上条当麻の自宅に向きましょう」

アニメーゼ「ちょ！？あれって、早く着くけどその間は地獄を体験するってあの噂の！？」

神裂「では、行きましょう」

アニメーゼ「待つのです！神裂火織！明日の最初の便ではダメなのですか！」

神裂「ちんたらしているとおの口うるさいローラ＝スチュアートが嗅ぎつけて足止めされる危険性があります。」

ローラ「クシユン！誰か私を噂しました？」

神裂「ッ！行きますよ！シスターアニメーゼ！」

アニメーゼ「え！？ちよ！？きゃああああ！！！」

神裂は荷物をアニメーゼを旅客機に放り込む！少し経つと旅客機は動き出し、滑走路から離陸準備に入る。

そして、外には・・・

ローラ「さっきまで神裂が居たような」

神裂「チッ！こんな急いでいる時に現れるとは・・・だが、なんとか間に合いました。これで邪魔はされ・・・」

P r r r r r r ! P r r r r r r r r r !

バキ!

アニエーゼ「か・・・神裂・・・さん？」

神裂「おや？私としたことがケータイを壊してしまいました」

着信が来た瞬間、ケータイを握りつぶし、ゴミ袋に入れる・・・今の神裂はかなりバイオレンスでアニエーゼは恐怖していた。

だが本当の恐怖はこれから・・・音速を超える3時間の空の旅、この地獄が待ち構えていることを本人は知る由もなかった・・・

ローラ「あら？神裂への連絡がつきませんか？せつかく、幻想殺しの搜索指令を出そうと思ったのですが・・・」

ローラは出発しようとする学園都市製の超音速旅客機の姿をながるしか、今のやることはないらしい・・・イギリス清教のの最大主教は意外と暇人だったりするのだ・・・

日本・・・上条家付近の民家

建宮「みんな集まったよな！これより、集めた情報の整理を始めるのよ！」

天草式十字凄教、約52名のメンバーは搜索を開始して約5日の搜索状況などを確認するべく、現在、司令塔である建宮齋字の元に集結した。

建宮「そんで？全員調子はどうなのよ？」

諫早「こっちはお手上げだよ。周りの住民はほとんど見かけていないわ」

香焼「こっちもっす。そこの住人とかを話したけど、当たりはないうっす！」

初老の諫早及び小柄な少年の香焼は主に付近の住民からの情報収集と周りの魔術師らしいいき人物の搜索にあたるが収穫はななかった。

牛深「こっちもだ。警察に化けて情報を洗いざらい調べたけど、何も見つかりはしないぜ」

野母崎「同じく」

大男の牛深と既婚者の野母崎は警察からの情報捜索を行なったがこ
つちも収獲件数ゼロ！

残りの面子も上条当麻に関する情報はほとんど手に入らなくほとん
ど手詰まりの状況の報告が続く・・・

建宮「対馬、おまえの上条家突入のグループはどうなのよ？」

建宮は女性メンバーの方へ、情報提供を求める。そして、そのリ
ーダーを務めるふわふわ金髪の対馬が代表として報告する。

対馬「そうね。強いて言えば、痕跡を見つけたってことね」

ざわざわ・・・

対馬の言葉に全員動揺する。まさかの上条当麻が行方不明になった
原因になったモノ見つけることが出来たととなると今さっきの空気の
流れが変わる。

建宮「それで!？」

対馬「その痕跡を見つけて今、五和が残って調査しているところよ」

よく見ると五和の姿が見当たらない。上条当麻が行方不明になったと聞いて動揺し焦りながら必死に搜索をしていた。

そして、いざ痕跡を見つけたとなると率先して調査を引き受けたのだ。

建宮「よし！むしろも急ぎ上条邸に向かうのよ！」

対馬「ちよつと待って！このあとが大切なことよ！」

一気に士気が上がったところを抑えつつ話を続ける。

対馬「痕跡の他に問題を見つけたの！一つ目、上条邸の地下に無数に枝分かれた龍脈の集結点する龍穴に近いモノがあること、2つ目、多分、上条当麻の父親の趣味のものだと思われるけど世界各地で集められた骨董品の中に魔術関連に関わるモノが混じっていたこと」

建宮「要するに……」

対馬「少しでも振動があれば、何らかの術式が発動する危険があるってことよ」

ざわざわ・・・ざ・・・わ・・・

再び重い空気になる。吉報が入ったと思えばその逆の凶報も入る。天草式面々はとあることを思い出す。女教皇（神裂）が話してくれた。とある夏の出来事の話・・・

建宮「エンゼルフォールの・・・再来」

香焼「どうするっす！教皇代理！」

牛深「もし、発動したら大変だぞ！」

野母崎「ん？ちよつと待て！？五和は今その上条邸だぞ！」

「「「「「！！」「」「」

電流が走る！全員、パニック状態で民家から出て五和の救出に向かおうとする

建宮「みんな落ち着くのよ！焦ってことを起こすと取り返しがつかなくなるのよ！」

さすが、教皇代理である。パニック状態に陥っていた全員を落ち着かせた。

建宮「いいよな！慌てんな。これから五和救出に向かうが誰も焦んなよな」

対馬「ここはプリエステスに連絡を取った方が・・・」

建宮「それはならぬのよ。今、プリエステスが来てしまうと五和の感動救出大作戦がしっぱ・・・う！」

対馬「あんたつて男は今の状況を・・・」

建宮「待て！落ち着くのよ。これはみんなの同意でな？なあ！みんなそうだよな？」

救いを求める建宮だがほとんどが冷たい目線で睨む。そんな話聞いていない。一部を除いて・・・

諫早「代理！こんなとこでふざけていないで、とっとと五和を助けに行くぞ」

初老の諫早はこの空気を変えようと一声し、目的を戻させる。

建宮「そ・・・そうなのよ！お前ら五和を助けに行くぞ！」

「「「「おーーーーー！！」」」」

まあ、色々あったが天草式のメンバー全員は急ぎ上条邸へと足を運ぶのだった。

続く・・・

神隠し搜索？（後書き）

？終了！

次回、学園都市サイド編を予定！

では次回も楽しみにしていってください！

ご感想とかをお待ちしております！

神隠し搜索？（前書き）

最近、急がしくて投稿が遅れしまいました。
大変申し訳ありませんm（| |）m

では、本編をどうぞ！

神隠し搜索？

天草式の行動から数時間前の学園都市……

小萌の自宅

小萌「うえええええん！上条ちゃんは……上条ちゃんいつになれば戻ってくるのですかー！ー！ー！」

とある高校の当麻の担任である月詠小萌は今だ見つからない当麻を心配していた。テレビには毎日毎日同じ内容のニュースしか流れず、小萌は泣くしかなかった

インデックス「小萌く心配しても仕方ないよ。トウマはちゃんと戻ってくるよ」

小萌「うう……でも、インデックスちゃん。もう上条ちゃんがいなくなつて一週間ですよ？それで何も手掛かりが見つからないのですよ」

インデックス「大丈夫だよ。トウマはよく色んなことに巻き込まれるけど、ちゃんと戻ってくるよ。だけど、ほとんどが病院だけど」

ちなみにインデックスは当麻の部屋で上条が帰ってくるのを待っていたが、いつまで立っても戻って来ないため、小萌の家に厄介にな

っている。そして、上条当麻との行方不明の放送が流れるととても一人で部屋に戻れなくなり現在の状況になっている。

ガチャッ

ステイル「失礼するよ。ここにインデックス……」

小萌「あ！神父さん！」

ステイル「っ！？あの時の……」

訪ねてきたのはステイル「マグヌスだった。上条当麻が行方不明になりイギリス清教は禁書目録の回収のため、ステイルを送り込んだが……その場にいたのが運悪く、大霸王祭で知り合ってしまった小萌だったため、対応に困る。」

小萌「あれ？どうしました？私に何か付いているのですか？」

ステイル「い……いえ（なんでこの人がここにいるんだ）」

小萌「う……ん？」

小萌の少し悩んでいる顔に少しときめく14歳の少年……これが

上条より年下には見えないのがまた不思議・・・

インデックス「なんでスタイルがいるの？あ！もしかして、トウマについて何か分かったの！？」

小萌「当麻？え！？上条ちゃんについて知ってるんですか！？神父さん！？」

スタイル「え！？ちょ！？待て君たち。僕は上条当麻について何も知らない。検索には天草式の面々が動いて・・・」

インデックス「天草式・・・それなら当麻について何か情報を持っているのかも！」

スタイル「ちょっと！話を・・・」

小萌「何か知っていますか！神父さん！？」

スタイル「い・・・いや、俺が知っているのは・・・」

幼女体型女性たちに押されるスタイル。言いたいことがまるで伝わらない。むしろ2人で勝手に話が進んでしまいついていけない。

インデックス「それで天草式はどこにいるの？」

スタイル「僕には関係ないことだ。教えるわk・・・」

小萌「教えてくれないんですか？」（；；）うるうる・・・

ステイル「うつ・・・」

やれやれお年頃のステイルさんには幼女達？のお願いを断れない・・・
・そしてこのやり取りが続き最終的に本来の目的を忘れてしまうの
だった・・・

とある女子寮

吹寄「あの馬鹿はいつになったらもどつてくるんだ。そこらへんで
倒れてるのか。まったく、だからあんなに栄養のあるものを摂取し
ると言ったのに」

同じクラスの吹寄整理は当麻を心配しながらテレビを見ていた。

吹寄「むっ、居場所が特定できれば上条当麻を無理やりでも探し
出せるのに」

ガチャッ！

御坂妹「ターゲット発見！とミサカは目標を確保し、輸送車に連行
します！」

シスターズ1「了解とミサカ10039号は援護に回ります」

吹寄「だ・・誰よ!?!あんた?」

いきなり部屋に突入してきた同じ顔の少女達に囲まれ、動揺してしまふ。無理やり腕をつかまれたので抵抗する吹寄だが・・・

ガチャツ!(銃口を向けられる)

御坂妹「抵抗するなら即座に射殺しますとミサカは警告します」

吹寄「ッ」

アサルトライフルの銃口を向けられ、抵抗をやめ、仕方なく支持に従い、外に停めてあった装甲車の中に押し込められる。中は窓もなく薄暗い空間が広がっていた。

御坂妹「ご命令道理お連れしましたと御坂は報告します」

雲川「お疲れ様、では次の作戦を移行しましょう」

御坂妹「了解ですとミサカは運転席に移動します」

御坂妹が運転席に着くと車が動き出す

吹寄「雲川先輩！これは！？」

車の奥に座っているのは当麻達より上級生の雲川芹亜、謎の多い『名前だけは知っている美人の先輩』と周りから認識されている少し可哀想な天才少女である。

雲川「悪いわね。吹寄、ちょっとつきあってもらうけど」

吹寄「いつたい何に・・・ですか？」

不思議に思い、雲川に問い詰める。雲川は涼しい顔で返答する

雲川「ん？最近噂になっている神隠しにあった男女を探しに行くんだけど？」

まさかの返答に驚き、更に深く尋ねる

吹寄「雲川先輩、もしかすると上条当麻がどこにいるか検討があるのですか？」

雲川「ええ、ある程度だけど」

吹寄「この流れからすると上条当麻搜索を手伝えということですか・・・いいです。手伝いましょう」

雲川「理解が早くて助かるわ。吹寄」

吹寄が新たに仲間に加わった！（*・・*）　パンパカパーパーン！

黒子「遅いですわよ。雲川さん。人を待たせないくださいますか？」

装甲車の奥には緑色の腕章を付けた少女が3人乗っていた。

その中に白井黒子が覇気を出しながら出発をまっていた。

雲川「あら、ごめんなさい。でも、私は御坂美琴を目的で探しに行くつもりではないけど？降りるのなら今のうちよ？」

黒子「私と貴方は目的は違うけど、利害が一致してこうやって協力しているのですわ。あなたの方も私と風紀員ジャッジメントの力が必要ではなくて？」

雲川「うふふふ、そうね。私だけでことを進めることは出来るけど、手間が掛かるのよね」

黒子「ふん！私は一刻も早くあの類人猿からお姉さまを救い出さなければなりませんのよ！」

佐天「あの白井さん！噂では駆け落ちって話が上がっていますけど・

・・・」

ガガガガガガガガ！

佐天「ひっ！？」

佐天の周りに鉄針が・・・

初春「だ・・・ダメだよ。今の白井さんを刺激しちゃ」

黒子の向かい合わせの席にいる佐天涙子と初春飾利・・・二人は何も知らずに白井黒子に拉致られて、現在の状態に至る・・・でも、黒子の目的は初春で佐天はおまけ・・・

黒子「いきなり連れてきて申し訳ないけど・・・わたくしのお姉さまを探し出すのに命を掛けて手伝いなさい。う~~~~い~~~~は~~~~る~~~~」

初春「は・・・はい！」

初春には拒否権はない。もしここで断ればどんな恐ろしいことがまっているか・・・それを恐れながらも持ち歩いているノートパソコンに何かを打ち込んでいく・・・

吹寄「あ・・・あの・・・雲川先輩？私は上条当麻を探しに行くのは構いません。だが、この状況は一体何なんです？装甲車まで持ち込んで、一体何を・・・」

ガン！ガン！カーン！・・・

吹寄「な・・・なんだ！？」

いきなり、外から何か硬いものが装甲車の装甲に弾かれる音が鳴り響く！

雲川「あら、では、白井さん」

黒子「初春！」

初春「は・・・はい！」

キーボードのenterを押す。少し経つとさっきまで騒音が消える。

吹寄「静かになった・・・これはいったいどういうことですか！」

初春「え〜と、学園都市のネットワークをハッキングして外にいた警備ロボを機能停止にしました。」

初春は己のしたことを単刀直入に説明し、雲川もどのような状況か説明する。

雲川「まあ、簡単に言うと私たちはとあるテロリストに拉致られてしまったって設定で都市外に出る予定だったけど？」

吹寄「な・・・なんですか。その設定は！ま・・・まさか、この装甲車とかほとんど盗品!？」

雲川「盗品？何を言ってるの？使わない粗大ゴミを有効活用しているだけけど？それに行方不明になった方が学校の単位は心配はいらないでしょ？」

吹寄「む・・・意外と正論かも」

ちなみにこの装甲車は学園都市で最近開発された新型で、装甲はもちろんその他の装備も充実しており、乗車可能人数は20名以上！大型武装などの積み込みも可能なハイテク万能装甲車である。それが3台、用意されており、1号車に雲川含む主な要人用にし、2〜3号車はいろいろの物資と機材及びシスターズが30人搭乗している。注、この装備はシスターズ達が奪取し色々改造した面があり、正式には出回っておりません。

冥土帰り「やれやれ、もしものための医者が必要と言っていたがまさかここまで大事をやるとはねえ」

雲川の相向かい座っているのは上条当麻のよくお世話になるお医者さん・・・今回は当麻がもしも大怪我を負っている可能性を含めて特別に同行する。まあ、上条当麻だから再会していた時は血まみれになっているかもしれないかも・・・

冥土帰り「でも、必要な機材や資材を用意していくんだから、現地でのトラブルには対処できるからね」

雲川「今回は申し訳ありません。先生」

冥土帰り「いやいや、上条君は僕の患者さんだからね。また、何かに巻き込まれて怪我しているのもう確実ではないかと僕は確信しているよ」

もう現に戦国時代では大怪我を負っております。当麻さん・・・冥土帰りに会った瞬間、病室送りは間違いない！

そんな会話を続いている内に装甲車はとある人気のない場所に止まる

御坂妹「目的地に着きました。全員、シートベルトを着用してくださいとミサカはあらかじめ注意を促します」

雲川「さて、もうここからは後戻りはできませんわよ。みなさん準

備はよろしいですか？」

全員無言で席に座り、各自シートベルトを着用していく。何も知らされていない吹寄残して・・・

雲川「吹寄、早く席に着きなよ。危ないけど？」

吹寄「なんですか！？何がおき・・・」

御坂妹「カウント・・・3・・・2・・・1・・・爆破！」

連続的な爆発音の後、足元の揺れが起きた後、内臓が浮かび上がるような無重力感・・・

雲川「吹寄、どこかに掴まるのよ！結構落ちるわよ！」

吹寄「ちよっと！？まさか落ちてるの！？？」

雲川「そうよ！私が見つけた秘密の地下通路。中は下水道が通っており、そこから海に出る。その後、神奈川県はどこかで上陸後、目的地に直行よ！」

吹寄「地下って！？？落ちる上に水中を突き進む！？？」

雲川「アハハハ！大丈夫。大丈夫。この装甲車は汎用性が高いのが売りなのよ。たとえば火の中だろうと水中だろうと問題はゼロよ。」

吹寄「そ・・・そそ・・・それで？ いったいつまで落ちるのですか！？」

雲川「うくくん・・・100メートルくらい？」

そして、吹寄は何も言えなくなった。3台の万能装甲車は学園都市に眠っている地下水道の中に闇の中に落ちていった・・・最後に3つの音が穴の中から響きわたるのであった・・・

その頃・・・神裂達

空港にあった学園都市製の超音速旅客機に搭乗した神裂火織とアニメーゼは3時間の空の旅を満喫・・・出来るはずがなかった。

アニメーゼ「くおおおおお！く・・・くるしい」

物凄いGが小さいアニメーゼを襲う。そして、これに無理矢理乗せられたことを後悔している。

神裂「うん。思った以上に早く着きそうですね。これならあの2人（土御門&オルソラ）に追いつくでしょう」

アニーゼに比べ、意外と冷静に短い空の旅を味わっていた。その隣で苦しんでいるアニーゼは・・・

アニーゼ「か・・・かんざき！な・・・なんで、普通でいられんですか！」

神裂「ん？何を行っているのです？あまり、Gはかかってないではありませんですか」

アニーゼ「・・・・・・・・・・」

もう言葉を失うしかなかった。神裂火織は聖人。そのため、人並み以上の身体能力を持つものがこのような化け物メカに乗ってもの何事も普通で入れられるのは当然に近いのだ。

アニーゼ「ば・・・化け物め」

神裂「ん？何か言いましたか？」

アニーゼ「くおおおおお！あああああ」

返答したくても襲いかかるGの重さに体が耐え切れず、悲鳴だけし

か上げられない・・・なんと哀れ・・・

神裂「さっき思いついたのですが、この旅客機はちょうど神奈川県を通過するそうです」

アニエーゼ「だ・・・だから？」

神裂「後、一時間半くらいで神奈川県です。そこから緊急用パラシユートで降ります」

アニエーゼの顔が蒼白に変わる。超絶G地獄からやったことがないスカイダイビング・・・一難去ってまた一難・・・絶望を覚える

アニエーゼ「か・・・かみじょう・・・とうまもこのような・・・思いをしたのですか・・・ど・・・同情するです」

もう涙も出ないと言わんばかりに行方不明の当麻に同情するアニエーゼ・・・

後、一時間半の空の旅（地獄）はまだ長い・・・一人はゆっくりくつろぎ、もう一人は悲鳴と恐怖の時間が続くのであった・・・

続く・・・

神隠し搜索？（後書き）

だんだん役者が揃ってきました。

さて、今回は飛ばされて数日たった当麻サイドです。

織田家家臣の柴田勝家を助けるために負傷してしまい、長い眠りから覚めた上条が見たものは！！

では次回も楽しみにしててください！

ご感想などお待ちしております！

最初の夜（前書き）

いやはや、今回は当麻サイドです。

ではではー

最初の夜

とある武家屋敷

あの戦から3日経ち、もう少しで4日目になりかかる月の明るい夜に死線をさまよっていた当麻が目覚めた。

当麻「い・・・た・・・ここどこだ？」

戦に乱入し重傷を負った当麻は3日間眠り続けていた。傷は完全には治癒していないため、弾が被弾した腹部に激痛が走る。

当麻「あれ、あの時俺は鎧を着ていた女の子を助けて、それから・・・どうなった？」

今、当麻はとある和式部屋で敷き布団の上で仰向けに寝ており、服装は動きやすい着物姿になっていた。

当麻「いた・・・腹が痛いな・・・くそ」

起き上がった当麻は閉まっていた障子を開け部屋から出る。外には広い庭と学園都市とは比べ物にならないほどの星の海が広がってい

た。

当麻「うわ……俺つてもしかして、助けようとしたのが助けられ
ちまったか……これはお礼言わなきゃな」

実際は助けたが自分が死にかけ、助けられたと言った方が正しい。
だが、それを知らない上条当麻は屋敷の主を探すために屋敷の奥へ
と進んでいく……

通路を進んでいくと何かの音が聞こえてきた。当麻はその音のする
方へと足を運ぶ……そして、音が聞こえる部屋の前に立つ

当麻「なんだろう。この音、水の音？ハッ！」

やっと気付いた。この先は風呂場もしくは浴場に違いないと今にな
って気付く！毎度、このような所にくるとよくある不幸な出来事の
数々……当麻は色々と身の危険を感じその場を離れようとした。
そのとき！

ガラ！

女性「ん？」

当麻「あ……」

その瞬間、時は止まる！

運悪く女性は入浴を終え、外に出てきた。しかも、今の格好は帯を巻かずオープン状態な浴衣姿に大きい胸と下着が露出している半裸状態！現代人では普通ありえないに等しい状態である。

年頃の当麻くん……この姿を見て発情する！……わけがない。その前に恐れていた事態で体のそこから恐怖で震え上がっていた。

当麻（ヤバイ……殺される……これマジで）

女性「？」

女性はなぜか首を傾げる……しかし、当麻がジロジロと躰を見るので自分の姿を確認すると……

女性「き……キサマ……っ！！この柴田勝家を知つての狼藉か……！！」

当麻「不幸……だ……！ちょ……？落ち着けよ！うああああ！？刀を取る前に胸と下を隠せ！」

女性の名は柴田勝家・・・長いポニーテールで神裂並みの大きい胸が特徴の脳筋タイプの女の子・・・そのため、頭より体が先に動く！

勝家「うおおおおお！死ねーーーー！！」

当麻「やめろーーーー！！」

パシッ！

勝家「なに！？この勝家の剣を白刃取りしただと！？」

当麻「あぶねえ~~~~って、うわ！？頼むから胸を隠して~~~~
！」

ギリギリ真剣を真剣白刃取りを成功させ、攻撃を回避するが・・・勝家の大きいおっぱいが浴衣からこぼれ落ちる。あくまで紳士でいたい上条当麻はあまり見ないように訴え続ける。

勝家「胸？・・・な！？き・・・キサマーーーーつまさか私の裸体を見たいがために私にこのような格好に差し向けたな！貴様は姫様の新たに飼い始めたサル（相良良晴）と同類だーーーー！！」

当麻「な・・・なに意味わからないことを・・・お・・・俺は助けてもらったお礼をいいにきただけで」

勝家「助けたお礼？ハッ！」

そのとき、勝家は思い出す。あの時、当麻は我が身を盾にして守ってくれたが、そのときに重傷を負い、緊急処置のために人工呼吸という……ある意味、濃厚なキス？を思い出す

勝家「う……うわあああああん！お前は知ってて、私の唇を奪ったのか！？私の初めて奪ったのか！？うわあああああん」

当麻「ちょ！？まじ、いい加減に服装整えろよ！ちょ！おま！？刀に力入れるな。後、胸！早く隠してくれ！頼むから————ッ！」

神裂並みの胸の迫力とバカ力に圧倒される当麻、少しでも気を抜けばあの世行き間違いなし！この命懸けのやり取りは勝家の気が収まるまで続いた……

1時間後……

勝家「す……すまない。我を忘れて斬り付けてしまった」

当麻「い……いえ、俺も勝手に部屋を出たのが悪かったので」

勝家の気が収まり、二人は居間でお互いの過ちを謝罪しあっていた。

当麻「あ！自己紹介がまだだった。俺は上条当麻。そこらにいる高校生です。」

勝家「こうこう？なんだそれ？」

当麻「簡単に説明しますと、うーっくん・・・勉強をする場所？」

勝家「なるほど、勉強に励む場所か・・・そういえば、あのサルも同じことを言っていたな」

当麻「サル？」

勝家「ああ、先日の戦でお前と同じでいきなり現れてな。今は姫のお気に入りになっているのだ。たしか名前は・・・忘れたな」

当麻「まさかだと思いましたが、相良良晴って名前では？」

勝家「お！そんな名前だった気がする！」

当麻（相良さんは無事に士官できたようだな・・・でも、姫ってどういうことだ？）

同じ時代から飛ばされた相良良晴の無事士官したことにめでたいと思つが、なぜか姫と言つ言葉に引つ掛かる。

相良は信長に仕えたはずなのに姫というのはなんだろうと考える・・・でも、目の前にいるこの女性・・・名前はたしか・・・

当麻「あの・・・名前をうかがってもよろしいせうか？」

勝家「む！私の名を知らんというのか！私は柴田勝家だ！この尾張で私の名を知らぬとは恥を知れ！」

当麻「いや、俺は最近ここに飛ばされて来た上に寝てたんですよ！
？しかも、いまさつき名を知ったばかりなのに」

そう、当麻の目の前にいる女性は、かの有名な柴田勝家！織田家の重臣で鬼柴田と恐れられていた人物だが・・・目の前にいるこの勝家は整った顔立ちに黒髪のポニーテール、更に神裂並みのGカップの胸をしたまさに美女・・・ちなみにのちのち知ることになるが歳は18歳！神裂と同じ年だが、神裂みたいに結婚適齢期を過ぎたようには見えていない。

当麻（たぶん、これは考えすぎだと思っが、信長って意外と女の子だったりすんじゃないか？そうでないと目の前のこの人が女性の説明ができない）

当麻の考えは意外と当たっていた。しかし、信長ではなく信奈というお姫様が信長の代わりにいるということ・・・これものちに明らかになるのであった。

数分後

勝家「ところでお前はこれからどうするんだ？」

当麻「あ……しまったー！考えたなかった！いきなり飛ばされてきて拳句にこのざまだ。何も考えていなかったー！ー！ー！ー！」

勝家「飛ばされたというのは理解できないが、要するに行き場所がないということだろ？なら私の小姓をやるか？」

当麻「はい？」（。 。）

勝家「ま……まあ、お前には命を2度ほど救われたからな。後1つの恩を返さないとな。それでいいだろ？」

当麻「はあ……それはとてもありがたいです」

勝家「む……何か不服か？」

当麻「い……いえ！俺みたいな男にこんなにも親切にしてくれるのでどうしてかな〜〜とと思って」

勝家「そ……それは」

恩返しもあるがあの時の戦で起きたことを周りにあまり出さないために見張るためでもある。

そのことを思い出すと無償に恥ずかしくなり顔が赤くなっていく……

当麻「あ・・・あの？勝家さん？顔が赤いですよ？」

勝家「そ・・・そんなことはない！後、今から私のことを柴田様が勝家様と呼べ！」

当麻「うお！？いきなり気の強いお嬢様になった！」

勝家「小姓つてことは私は主でお前は下僕だ！当たり前だ！」

当麻「そんな口調でしゃべると将来の花婿が見つかりませんよ」

勝家「お・・・大きなお世話だ！」

花婿という言葉に反応し、さらに顔を赤くするお年頃の勝家さん・・・冗談で言ったはずなのにまに受けているため、少々呆れる。

当麻（はあ～～まるで御坂と神裂が融合した感じだな・・・そういうえば、御坂の奴、大丈夫かな・・・）

勝家をあしらいながら美琴のことを心配する。ケータイは今持っていないため連絡はできないため、たぶん美琴も空に浮かぶ明るい月を見ているのではないかと思いつきながら無事を祈るしかなかった。

勝家「でも、今日は遅い。お前は早く傷を癒せ。仕事はそれからだ」

当麻「では、お言葉に甘えて部屋にもどる……ッ!？」

立ち上がるうとしたと戦で受けた傷が再び襲い、勝家の……

ボヨン!

勝家「はい!？」

胸の谷間に突っ込んでしまう。また再びその場に重い空気が流れ始めた……

当麻「ハッ!か・勝家様。こ……これは不可抗力というやつでして、決してわざとじゃ」

勝家「うう……こ……この変態め……………!」

当麻「ぎゃあああああ!不幸……………だ……………」
「……………」

当麻は勢いよく外に飛び出し、鬼柴田と化した勝家から逃亡をする! 傷の痛みを堪えながらひたすら走り続ける。追いつかれると間違はなくあの世行きに間違いはないだろう……だが当麻は恐怖を感じ

ていなかった。このようなことは美琴で何回も経験している。そのため逃げるには何も心配はいらなかった。しかし、このような事態をいかに収めるのかはこれから数時間悩まされるのだった……

これが上条当麻の小姓生活のいきなり波乱万丈の始まりだった……

続く……

最初の夜（後書き）

はいはい、始まりましたよ~~~~~！

これより上条さんは出世まじぐら！戦国の世の武将たちの心を鷲掴み！・・・なんて展開になるかもwwww

では、次回も当麻サイドから始まり、その次に現世に戻りたいとおもいます。

さてさて、当麻とヒロインたちはどうなるのやら・・・

では、次回もおたのしみに！

ご感想をお待ちしております！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2119y/>

とある戦国漂流

2011年11月20日21時41分発行